

医療ニュース1

肝臓ガンになりやすい
C型肝炎ウイルスを発見

肝臓ガンになりやすいタイプのC型肝炎ウイルス（HCV）を神戸大大学院医学研究所などのグループが発見。肝臓ガンの予防や早期発見に繋がる発見です。

HCVに感染して症状が進行すると慢性肝炎、肝硬変となり、肝硬変を治療しないと、肝臓ガンを発症する場合があります。

国内ではHCV感染者は約150万人、HCVによる肝臓ガンで毎年、約2万5千人の方が亡くなっています。

HCVの遺伝子を包むタンパク質（コアタンパク質）に変異がある場合、変異がない場合（発ガン率12%）に比べ6倍近い約70%、また、HCVの複製に関わるタンパク質（NS3）に変異があると、4倍近い50%程度の高発ガン率になります。

上記の肝臓ガンになりやすいタイプのHCV感染であれば、積極的に既存の薬物治療を受けてHCVを排除すれば、肝臓ガンの発症リスクを低下させることができます。

準備運動（ウォーミング・アップ）と
整理運動（クーリング・ダウン）

運動負荷が効果的かつ安全に実施されるためには、ウォーミング・アップと、運動終了後体調を整えるためのクーリング・ダウンが是非とも必要です。

ウォーミング・アップの効果には、①体温を温めることにより、細胞の活動を活発にし、肺や筋肉における酸素と二酸化炭素の交換を速やかにする ②神経と筋肉との協調や関節の動きを円滑にして、運動中の障害を予防する ③徐々に精神的な緊張を高め、運動を始めるために体全体の準備態勢を整える働きがあるなどが考えられています。

ウォーミング・アップは、寒い時ほど、また年輩者ほど、ゆっくり念入りに時間をかける必要がありますが、一般的には10～15分程度で良いようです。

クーリング・ダウン（整理運動）は運動後に蓄積された疲労物質の除去を早め、疲労回復を図るのに効果があります。

筋肉をリズムカルに運動させると、静脈血が心臓の方向へ流れやすくなります。（筋肉のポンプ作用）。しかし運動を急に止めると、この働きがなくなり、心臓への血液の戻りが悪くなり、血液循環に支障をきたすと考えられるわけです。その結果、めまいや吐き気、失神などの症状が生じたり、蓄積した疲労物質がなかなか除去されないということになります。

ウォーミングアップの方法：

- ①首、腰及び関節を中心に、体全体をゆっくり大きく動かす
- ②首、手、足などの関節を動かしながら、ゆっくりと歩き回る
- ③時々深呼吸を入れながら、数分間ウォーキングや軽くジョギングを行うなどです。

クーリング・ダウンの方法：

ウォーミング・アップと同様、軽いランニングやウォーキング、サイクリングなどの有酸素運動、10～15分。

ウイルスによるガン治療

ガン細胞にだけ増えるウイルスを先端技術で作出し、感染させてガン細胞を攻撃する「ウイルス療法」の臨床研究が東大病院で進んでいます。ガンに対する全く新しい治療法で、あらゆる種類のガンが対象です。

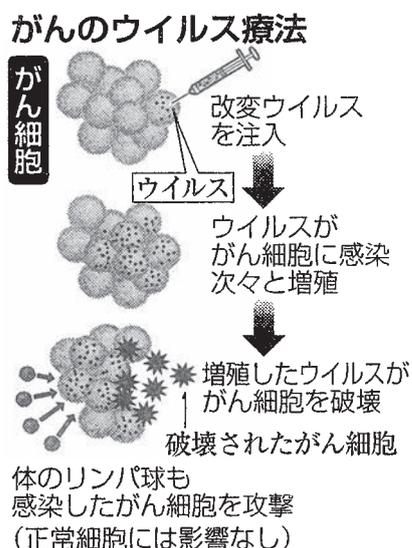
元来、ガン細胞は正常細胞に比べ、ウイルス感染に弱く、感染さえすれば、どんなウイルスでも、ガン細胞でよく増えることが知られています。

例えばパーキットリンパ腫というガンになった子どもが、はしか（風疹ウイルス）に感染し、そ

アラカルト

A LA CARTE

れが治るとともに症状が消えてしまうことなどが報告されています。



ウイルス療法の特徴

増殖するウイルスを用いたがんの新しい治療法

がん細胞でのみ増殖し、破壊する改変ウイルスを作る

感染したがん細胞はウイルスに直接破壊される

正常細胞への影響はなし

技術的には米国より日本が進んでいます。制度的な遅れを乗り越え、最新の治療法の実用化が待たれます。

日本人の死生観とガン

現在、日本人の2人に1人がガンにかかり、3人に1人がガンによって死亡しています。ガンは、からだの細胞が分裂する時に起こった「ミス」であり、老化の一種ともいえます。したがって、日

本は「世界の長寿国」になった結果、「世界のガン大国」になったともいえます。

実際、アフリカなどの、平均寿命が30歳代の国々では、ガンはほとんどみられません。ガンは40歳くらいから年齢とともに増える病気なので、平均寿命が短い国々では、ガンになる前に、インフルエンザなどの感染症や栄養失調で亡くなってしまっています。

ガン治療のあり方は根本的に変化は見られませんが、新しい薬物や技術が次々と開発されているため、延命は可能になりました。(ガンの半数は治癒、5年生存率は6割近くに上昇)

むしろ、変わったのは、医師と患者さんとの関係や告知のあり方の方です。昔は「お医者様にお任せします」でしたが、今は「患者様がお決め下さい」です。また、以前は、ガンという病名すら告げられませんでした。今は「治療法はもうありません。余命は3ヶ月です」などと、はっきり告知されるようになりました。「ゆるやかに、残り時間まで予測される死」に、私たちは直面しなければならなくなりました。

しかし、核家族化や病院死が進み「死の予習」は難しくなっています、宗教に頼る人は少数派です。私たちは「素手」で、「新しい死」に立ち向かわなければなりません。

核家族化(小学校のクラスの中で、おじいちゃん、おばあちゃんと暮らしている生徒は1~2名)と病院死(8割以上の方が病院で亡くなる)、このことが、日本人の死生観に影響を与えているといわれています。つい最近まで、日本人は大家族で暮らし、生まれ育った家の畳の上で亡くなっていました。子どもたちは、自分の老いと死を生活の中で「学習」「予習」することができたわけです。若い両親とだけ暮らす今の子どもたちは、生活の中で「老い」を見ることはありません。そして、死は、病院の中に「隠蔽」され、生活や意識の中から消えてしまっています。